

---

# 孤独な夕日 歪んだ月

石原 真琴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独な夕日 歪んだ月

### 【Nコード】

N0686M

### 【作者名】

石原 真琴

### 【あらすじ】

どこまでも平和な町、亜湖貝町。  
そんな町にある研究所で、月を嫌う夕日と、夕日を愛する月は出会  
う。

夕日は月を砕きたがり、月は夕日を手に入れたがる。

## 月に愛された夕日

六月七日 午前一時 三間坂研究所

海沿いの町、亜湖貝町。

穏やかな空気が流れる町の一角に、町とは正反対の空気を纏う研究施設、三間坂研究所は存在していた。

その中で二人の男が対峙していた。一人は警官の着る制服に身を包んでおり、もう一人は黒を基調とした服を着ていた。

「また手前か…」

警官らしき男―雪野京士郎は、憎々しげにそう吐き捨てた。

「覚えててくれたの？嬉しいなあ。俺も君の名前はよく覚えてるよ、京ちゃん」

黒い男―茶原奪は、明確な敵意を向けられているというのにそれを柔らかな笑みで受け流す。

「ゆ、雪野さん!!」

京士郎の背後から、彼の後輩と思しき青年が現れた。

「俺も加勢しまー」

「邪魔だ」

京士郎は一言そう呟き、彼の腹に軽く拳を叩き込む。彼は倒れ、京士郎の手により壁側に寝かされる。

「その子、後輩なんかでしょ？仲間を傷つけてどうするつもりだい？」

笑みを崩さぬまま、奪は京士郎に問いかける。彼は奪を睨み付け、「手前を殺すのはこの俺だ。他の腰抜け共は邪魔にしかならねえ。だから寝ててもらってるだけだ」

奪に対する憎しみと共に、そう吐き捨てた。彼はしばらく呆然とし、一瞬の後―

「ぶ…あはは!!」

先刻よりも大きく顔を歪め、大口を空けて笑いこけた。笑いを堪えるように口を押さえるが、肩は力タカタと揺れている。一応は落ち着きを取り戻し、だがクスクスと笑いながら彼は京士郎に言い返す。

「君に殺してもらえなら本望さ。それにしても……ふふふ……あははははっ！あぁ……京ちゃん、君って子は何て可愛いんだろっ……真剣な顔して『殺す』だなんて……あのね、京ちゃん。俺、今ちょっと鼻血が出そうなんだ。だって君がとてもとてもとてもとても可愛いんだもん。鼻血、出しても良いかな？あ、京ちゃんが汚れちゃうからやめようかな……うーん……どうしようかなー」

京士郎は呆れ顔で仁王立ちしており、やがて首をゴキリと鳴らし、奪に問う。

「その鼻血……俺が出させてやろうか？」

奪がその言葉の意味を理解する前に、彼の顔面に京士郎の右足による渾身の一撃が繰り出された。今まで戦ってきた人間の中で、京士郎の一撃を避けられた者はいない。故に、彼は心にちょっとした余裕を抱いていた。

だが、その余裕はあっさりと打ち砕かれることとなる。

「わお……京ちゃんは凄いな。そういえば京ちゃん、最近骨折ったんだよね？もう治ったの？あ、まだギプスしてるから完治してないんだね。そんな状況でそんな凄い蹴り出せるんだ？無理してる？俺のために無理してる？嬉しいなあ。そんな優しい優しい京ちゃんが俺は大好きだ……」

奪は紙一重で京士郎の蹴りを避け、おどけた調子で言葉を紡ぐ。殺されかけたというのに、脱はなおもそんな戯言を吐き続ける。彼の脳内に『懲りる』という文字は無いようだ。

と、その一瞬の隙に京士郎は一步踏み込み、今度は拳の一撃を彼の腹にめり込ませる。

「……っ！？」

突然のその攻撃に何の対処も出来ない奪はそのまま数メートル後

方へ文字通り吹き飛ばされる。

「馬鹿は一生寝てろ」

そう呟き、その場を離れるべく最も嫌悪している男がいるであろう方向に背を向けると――

「待つてよ……」

不意に、声をかけられた。

「ああ……？」

振り返ると、腹を擦りながら平気な顔をして立っている奪の姿が目映った。

「おま……っ！？」

あまりの驚きに、まともに声も出せないでいる京士郎。

「痛いじゃないか、京ちゃん……。君のお陰で内臓がちよつと潰れちゃった。相変わらずガサツだね。そういうところも可愛いよ」

あの強烈な一撃を食らったにも拘らず、奪はヘラヘラと笑いながら話し続ける。

「でも、これはちよつとだけム力ついちゃった。少し、お仕置きが必要だねえ……可哀想に」

悲しげな笑みを浮かべ、彼は右手を京士郎の胸の辺りまで上げる。その手には、鈍く光る黒い凶器が握られていた。京士郎の体が強張る。

「手前……どこにんなもん隠してやがった？」

「ん？ああ、この拳銃のこと？普通にポケットに入れておいたんだけど。入る前に取り上げられそうになっちゃってさ。間違つて殺しちゃった。正当防衛つてことで許されるかな？」

「過剰防衛つてことで捕まるな」

拳銃を睨み、己の腰に差してある日本刀を引き抜く。その様子に奪は目を丸くした。

「あれ？てつきり武道で来ると思ってたんだけど……。ていうか、今時日本刀って凄いな。それともレプリカかな？」

「本物だ。あと、日本刀持つてんのは俺だけだ。使い易いからな、

特別に許可してもらってる。…まあ、警察と言えど、見つかったら銃刀法違反で捕まると思うがな」

「ふうん…でも、本当に珍しいね？あ、刀が、じゃないよ？君が武器を使うことさ」

「最初に言っただろうが。手前を殺すのはこの俺だ…ってな」  
刀を構え、京士郎は走りながら叫ぶ。

「こっちのほうが確実に手前を斬り刻めんだよ…！」

確実に迫り来る死の塊に、奪は笑いかけた。

どこまでも残酷な、悪魔のような笑みを浮かべ、彼は引き金を引く。

「要するに、素手じゃ勝てないと思っただろ？お馬鹿な京ちゃん…」

そして、鋭い刃と小さな鉛が絡み合い―

## 月に愛された夕日（後書き）

初めまして、石原真琴と申します。

このお話、最初の方はただの戦闘物に見えるかもしれませんが、本当はベーコンレタスです。

はい、私はベーコン愛してます。大好きです。

どちらが受けか、どちらが攻めか…後の章で分かりますので、興味のある方はご期待ください。

それでは、短いご挨拶を終了させていただきます。

この作品を読んで、楽しんで頂けたのなら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0686m/>

---

孤独な夕日 歪んだ月

2010年10月16日00時30分発行